日本俳句名作全集 14

柳生忍法帖（全）

山田風太郎

◈カラー版・日本伝奇名作全集◈

柳生忍法帖(全)

山田風太郎

カラー版■日本伝奇名作全集14
柳生忍法帖
定価 六八〇円

昭和四十五年一月十五日 初版印刷
昭和四十五年一月二十五日 初版発行
検印廃止

著者 山田風太郎
発行者 遠藤左介
印刷 大日本印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社
発行所 番町書房

東京都中央区京橋三ノ五 〒一〇四
TEL(五六七)〇三一一(代) 振替東京一五八四四
©一九七〇
0393-720640-6959

柳生忍法帖

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

目次

柳生忍法帖

破戒門……五
堀主水一件……一九
七凶槍……二六
修羅の巷へ……四〇
蛇ノ目は七つ……五四
籠……六三
髯を生やした京人形……七六
十兵衛先生……八九
まんじ飛び……九八
般若組……一二
地獄の花嫁……一三九
水の墓場……一四六
晒す……一六五
江戸土産……一八八
北帰行……二〇五
僧正……二二九

女人袈裟……三三六
これより会津……三三七
銅伯夜がたり……三三八
断橋……三九一
首合戦……三一〇
沢庵手鞠唄……三三四
南船北馬……三三四
幻法「夢山彦」……三六四
沢庵敗れたりや……三六八
弧剣般若俠……三九三
十兵衛見参……四〇七
雪地獄……四二六
霞網……四四五
天道魔道……四六二
雲とへだつ……四八五

対談　山田風太郎　尾崎秀樹
装幀　上口睦人
装画　伊坂芳太良
挿絵　水木しげる
年譜　編集部編

破戒門

一

寛永十九年の春、砂けむりをあげて東海道をおし下ってゆく異様な大行列が、沿道の人びとの眼を見はらせた。

総勢は百人以上にものぼるであろうか。大部分は長槍を空にたてつらねた足軽だが、馬にのっている武士が七人ある。その七騎は、先頭から後尾ちかくまでほぼおなじ間隔をおいていたが、そのあいだに歩かされている人間たちをのぞきこんで、人びとはぎょっとした。

両側をつつんでいる足軽たちも、べつにかくそうとしてはいない。一頭の馬につき、ちょうど三人ずつ、墨染めの衣をつけた僧が二十一人、文字どおり数珠つなぎに縛られて、よろめきながら曳かれてゆくのであった。しかも、ただの縛り方ではない、両腕はうしろにくくりあげられているが、綱はそれぞれ輪にして、僧の首にかけてある。逃げることはおろか、遅れることも、転倒することさえもゆるされない。

「はやくあるけ」

「それ、ひょろつくと、うしろのおいぼれ坊主の首がしまるぞ」

間断なく、哀れな僧たちの腰や背に槍の石突きが飛ぶ。僧たちの衣はぼろぼろに裂け、はだしの足は血まみれになっている。

が、二十一人の僧は、砂ほこりを汗と涙で塗って、人間ではないもののような顔色になりながら、いずれも昂然とあたまをあげて歩こうとしていた。みれば白いひげの老僧や、十から十二、三の小坊主も数人まじえているというのに。

「まあ、何という無残な――」

「まるで犬か牛のように」

「しかも坊さまを」

両腕をねじりあわせて、この恐ろしい行列を見物する人びとは、そのうち、だれからともなく、彼らが百里以上もの西の高野山から送られてきたのだときいて、さらに身の毛をよだてた。そのうえ、人びとをなお恐怖させたのは、行列の先頭に三匹の小牛のような白い秋田犬が、目をひからせてノソノソとあるいていることであった。

「いったい、何をしたのじゃ」

「あれは元来坊さまでなく、高野山ににげこんだお武家らし

い」
「なんでも会津の殿様にむほんをおこした一門の衆だとよ」
「なに、むほん――それでは――」
そこまできくと人びとは息をのみ、ざわめきをやめて、その一行を見送るのであった。
行列は藤沢の宿場まできた。これから江戸まで十二里十二丁。
藤沢につくすこしまえから、先頭の馬にのっていた猿に似た小柄な武士が、うしろにひく三人の僧の綱を足軽に託し、ひとり後方へ馬を走らせていって、あと六人の騎馬侍とつぎつぎに何やら話し合い、打ち合わせがすんだとみえてかけもどってきていたが、藤沢にはいると、江戸へゆく遊行坂を見すてて、急に南に折れて進み出したのである。彼のうごくとおりに、三匹の巨大な犬が従う。
「具足丈之進、どこへゆく」
綱で首をひかれながら、ひとりの僧がいぶかしげに声をかけた。
「江戸へはゆかぬのか」
猿面の武士はふりむいて、にやりと歯をむき出していった。
「江戸へゆくまえに、鎌倉のおんな寺へ参る」
「なに」
たずねた僧は五十あまりの、みるからに剛毅の相の所有者であったが、具足丈之進の返事に血の気がひいたようであった。
「おんな寺――東慶寺へゆくと申すか」
「堀の一族一党、あか子にいたるまで草の根わけても捜し出せとは殿の仰せである。うぬらの縁につながる女ども三十人あまり、東慶寺へかけこんで尼になりすましておるのを知らぬわれらと思うか」
「ようさがしあてた。しかし」
僧の声は不安にしゃがれた。
「東慶寺は弘安以来百五十年、男子禁制の寺であるぞ」
具足丈之進はふりかえって、また歯をむいて声もなく笑った。
「うぬの娘お千絵も尼になっておるであろうな。殿の御執心であったあたら十九の花盛り、美しい黒髪をおろして念仏三昧とは、うぬの大不忠の報いとはいいながら――」
「だまれ」
僧は叱咤した。
「丈之進、その東慶寺へ何しに参る」
「ここから鎌倉へはたった二里半、せっかくちかくを通りかかったのだ。生きておるうぬらの最後の姿をみせて菩提をと

もらうよすがとしてやろう。武士の情けだ。ありがたいと思え」

僧はしばらくだまっていたが、やがて唇がわななき出すと、

「かたじけない」

とふかい声でいった。そして、綱のかけられた首をさしのばし、うしろをむいて呼ばわったのである。

「おおい、東慶寺におる女どもに、最後の対面をさせてくれるそうな。みな礼をいえ」

いままで、生きながらの地獄旅に、泣きごとはおろか、うめき声ひとつもらさなかった二十人の僧たちは、はじめてどよめいた。まるで氷と化したからだに熱湯をふりかけられたような衝動をみせ、その目に涙がうかんだのである。

「かたじけのうござる」

「これで殿へのお恨みもいささか消えたようでござる」

その感動ぶりを、七人の武士は、馬上からうす笑いしてながめていた。

行列は、藤沢から一里、江ノ島を通り、春の白波たつ七里ケ浜をよぎってさらに一里半、鎌倉にはいっていった。

かつては覇府であった鎌倉も、北条滅亡以来三百余年、いまはただ無数の堂塔伽藍をいだく一寒村にすぎない。地ひびきをたててはいってきたこの異形の大行列を、心みだして迎えるものは散る花ばかりとみえた。春がふかいので、いっそうわびしいのである。

山ノ内街道を北へすすむと、右の深い木立ちのかなたにみえる円覚寺の甍と相対し、左の丘陵の中腹に建っているのが松ケ岡東慶寺であった。

馬からおりた三人の武士が、苔むした高い石段を、山門のほうへゆっくりと上っていった。

二

男子禁制の尼寺だから、寺内に雄ねこ一匹もいないといえば嘘になる。門番は男であったし、それ以外にも少数ではあるが、下男もいた。ただ彼らは例外なく老人で、しかも腰に数個の鈴をつけられていた。

その老門番が、石段をのぼってくる[redacted]人の武士をみると、まったく別の星からきた人間をみるように、あわてて門をしめかかったのである。

「あいや」

と、三人の武士は足をはやめて門のまえに立ったが、このとき厚いとびらは音たててとじられた。

しかし、門の内側に鳴る鈴の音をきいて、彼らは口ぐちに名乗った。

「われらは会津藩加藤式部少輔家中のもの、鷲ノ巣廉助と申すものです」
全身が瘤からできているかと思われる巨漢のひげ侍であった。
「拙者は司馬一眼房」
と、もうひとりがいう。これはなるほど左眼のつぶれた青ンぶくれの入道あたまである。
「大道寺鉄斎」
最後のひとりは、真っ白な髪とひげにつつまれた枯木のような老人であった。それがねとなで声といってもしかるべき神妙な声でこういった。
「もはや御存じのことであろうが、昨年春、あるじの式部少輔に大不忠のことをしでかし、会津を退転した元家老堀主水の一党を、このたび御公儀のおゆるしをうけ、高野山より召し捕って、ただいま江戸へ護送の途中でござる。ところで主水の申すには、彼らの縁につながる三十人あまりの女どもが当寺に逗留いたしおるとのこと、今生のなごりにひと目会うてゆきたいとの願いにより、いま山下に待たせております。このむね堀一族の女どもに告げられたうえ、最後の対面のためまかり出るようお申しつけ相なりたい」
「しばらく、待たっしゃれ」
門の内側を鈴の音が遠ざかっていった。
三人はあらためて山門を見あげた。鉄鋲をうった巨大な山門は、尼寺にふさわしからぬいかめしいものであった。
「この門は、駿河大納言様の御門を移したと申したな」
「うむ、なかなかの客殿。仏殿、方丈なども、みな駿河からひいてきたときいておる」
「それではこれが五十万石の門というわけだな、道理で――」
と、三人はうなずきあった。
駿河大納言とはいうまでもなく将軍家光の弟で、駿河五十万石を領しながら、むほんのうたがいをうけて、九年前切腹の羽目においこまれた徳川忠長だが、この尼寺は開山以来百五十年の歴史をもつとはいえ、あまり老朽していたために、忠長自刃の翌年の寛永十一年、主だった建物を駿河城から移建してきたものであった。
門の中にまた鈴の音がちかづいてきた。しかし、数人の足音であった。
「会津の衆」
下男の声ではない。老尼らしい声であった。
「ただいまのお申し入れ、住持様に言上いたしましたなれど、せっかくながら、女どもを逢わせることはならぬとの仰せであります」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

「ほう」

三人の武士はちょっと意外だったらしく、門の外で顔を見あわせたが、白髪の大道寺鉄斎が目でおさえ、またねこなで声でいう。

「それはまたなにゆえでござるか」

「ひとたびこの寺にはいった女人は、門をくぐったとき、恨み、哀しみはもとよりのこと、恩愛ともにこの浮世からふっつり縁を切ったのです。今生の別れに、母、女房、娘に会いたいという志はふびんながら、いまは御仏のみにすがっておる女人たちの小さな胸に、また涙の波をあげましょう。もはや男どもの修羅の世界をみせなさるな、どうせ死ぬものならば、男らしゅう死になされ、われらともども心からなる回向はささげ参らそう、そうおつたえなされ」

「これは仏に仕える方とも思われぬ無慈悲の仰せ。——われらすら、武士の情けによって、わざわざ鎌倉まで回り道いたしたに」

「武士の情け？」

老尼の声がきびしい調子にかわった。

「いま門番にきけば、囚人どもの首には獣のように縄をかけておるとか——武士たるものをそれほど恥ずかしめて平然たる方々が、そのお言葉を口になさる」

三人の武士の顔が硬直した。

「女を出せと申さるるも、決して慈悲のこころからではあるまい。かならず恐ろしいわなであろう。——おひきとりなされ」

「いいや、ひきとらぬ」

と、大男の鷲ノ巣廉助がいった。

「われらは堀主水に、女どもにあわせてやると誓言したのだ。会津七本槍に名をつらねるものが誓言して、それを破ることは相ならぬ」

「それは、そちらの勝手。当尼寺はふところにはいった哀れな鳥を、みすみすわなと知りつつ外に出しはせぬ。きくがよい。松ケ岡東慶寺は女の城じゃ」

「女の城。——」

青入道の司馬一眼房がにやりと笑った。笑いながら、石段の下で見あげている具足丈之進に手をふった。丈之進がうなずいて、寺の横の方向に走り出した。三匹の秋田犬が砂けむりをあげてあとを追う。

「女の城ときけば一番攻めてみたいの。尼、みごと護ってみるか」

「何をしようというのじゃ」

老尼はぎょっとしたようである。

「当寺は北条時宗公御台さま覚山尼公が女人救済の尼寺として勅許を受けられてより、いまだかつて外より男を入れたことのない寺じゃ。時移り世は変わっても、この寺法に手をふれた幕府はないぞ。それを、そなたら破る気か」

このとき寺の周囲で、びょうびょうと犬のほえる声がした。犬というより野獣のほえ声である。各僧房からはしり出た尼僧たちのうち、裏門および左右の潜り門のちかくにいたものは、空をふりあおいで恐怖のさけびをあげた。

その門の屋根に、それぞれ小牛のような犬がすわって、血ばしった目で見おろして、魔王のごとくすさまじい咆哮をあげているのであった。

その声におとらぬさけびを、鷲ノ巣廉助があげた。

「破る」

鷲ノ巣廉助は門のまえで左足を一歩ふみ出して、半身の姿勢になって、ひじをひいた。

「おおりゃっ」

ひっ裂けるような絶叫と同時に、右腕をつき出した。

掌はこぶしににぎってはいなかった。親指だけをまげ、四本の指をそろえてのばしたかたちであった。それが、鉄鋲をうった厚い樫の扉を、まるで薄紙のごとくつきぬけたのである。

腕は電光のごとくひかれて、その左約三尺の点をまた突いた。大兵なからだを敏捷に平蜘蛛みたいにかがめたかと思うと、下方に三つめの穴がかっと突きあけられた。とみるや、すさまじい勢いでとびらを蹴りあげたのである。——とびらには、人が通りぬけられるくらいの三角形の穴が、ぱっくりとひらいた。

これが、ほとんど一瞬のことだ。怪力というより、なんたる恐るべき手刀の威力だろう。——彼はたしかに「破る」といった。しかしこの厳粛な禁断の門を、だれがこう無造作に、文字どおり破ると考えたろう。

三角形にあいた穴から、三人の武士はつぎつぎにはいってきた。気絶したようにつっ立っている老尼僧をみて、鷲ノ巣廉助はにたりと笑った。

「破ったが、どうした?」

「お出合いなされ、狼藉者がちん入しました。お出合いなされ……」

と、尼僧は鶏みたいに首をさしのばしてさけんだ。

すでにあちらの仏殿、こちらの方丈、樹立ちの中の僧房からは、ばらばらと無数の白い影がかけ出し、走りまどっている光景がみえる。ひろい境内の青白にただよっていた香煙の霞はいっきにかきみだされた。

門番がとび立って、すぐよこの鐘楼の方へ走り出した。鐘

をついて、この大椿事をちかくの寺々に告げ、その助けをもとめようとしたのである。門番が撞木の綱をとったとき、白髪の大道寺鉄斎は、二度跳躍してそのあとを追った。実にこの枯木のような老人は、二飛びで二丈はたしかにとんだ。その腕から黒い鎖がのびると、鐘楼までさらに一丈はあるのに、門番のひいた撞木はそのままうごかなくなった。鎖が撞木に巻きついたのである。大道寺鉄斎の手にあるのは、鎖と鎌であった。

「見ろ」

鉄斎がほそい手で鎖をひくと、ふとい綱につるされた撞木は、まるで細工物のように地上にもぎおとされた。とみるや、鎖は生命あるもののごとくはねかえって、鉄斎の手中にもどった。

三人の武士はノソノソと境内をあるき出した。この女の聖地に足をふみ入れたことに、なんの遠慮も恐れもおぼえるどころか、にげまどう尼僧たちをながめて、好奇と嘲笑と、そして妙な好色のひかりすらはなっている傍若無人な目であった。

「堀一党の女どもは出合え」

「逃げようとしても、もはや逃げられぬぞ」

そのとおりだ。破られた山門の扉の内側に四人めの武士があらわれていたし、ほかの三つの門の屋根には、なお三匹の巨大な犬が、びょうびょうと牙をむいてほえつづけている。

しかし、このとき三人の武士の足がぴたりととまった。

三

ゆくての方丈から一団の影があらわれた。人数は二十人あまりであろう。大半はむろん尼僧であったが、そのなかに黒い衣ではなく白小袖をき、頭を切下げ髪の若い女が六、七人まじっていた。それが、周囲のさわぎも目に入らないかのように、粛々とこちらにあるいてくる。すると、悲鳴をあげてにげまどっていた尼たちも、一杓の水をあびたようにおのれの立っていた場所にひざまずいた。

しずかな一団は、三人の武士のまえにとまった。その中から、純白の頭巾をかぶったひとりの尼僧がすすみ出て、三人をじっと見つめた。年は三十をややすぎたくらいであろう。美貌というより、この世の人間とは思われぬ清浄さときびしさと気品に彫刻された表情であった。さすがの凶暴な三人侍も思わずひるんだ。

べつの老尼がいった。

「当尼寺の御住持天秀尼公であらせられます」

人を人くさいとも思わぬ三人の男の面だましいにおさえき

れぬ動揺の波がひろがるのをみて、老尼はなおいった。
「御存じであろうが、天秀尼さまは、故豊臣秀頼公のおん姫君、すなわち豊太閤のおん孫にあたらせられるおん方じゃ。いまきくところによると、そなたらは会津の加藤家のものとやら、先代の左馬助嘉明どのは賤ケ岳七本槍のひとり、音にきこえた豊臣家恩顧の家柄ではないか。尼公さまに御無礼があってはなりませぬぞ」
もとより三人の武士がためらい、動揺したのは、そのことを知っていて、いま眼前にあらわれたひとを、太閤の孫と直感したからだ。それを承知の上であばれこんだ三人であったが、あらためてこう名乗られると、やはり本能的に全身がこわばるのを禁じ得ないのであった。
天秀尼はしずかにいった。
「いままでの所業はゆるします。このまま、ひきとるならば」
珠をころがすような澄んだ声である。鷲ノ巣廉助、司馬一眼房、大道寺鉄斎はわれしらずはっとあたまをさげかけた。
そのとき、尼公をかこむ一団が、すっとかげった。いままで、あくまでも明るい春の日をあびていたのが、雲でもかかったかと空を見あげる者もなかったが、ふいに頭上にふれた異様な感触にはじめて顔をあげて、みな愕然としたのである。
彼女たちは大きな網に覆われていた。まるで紗のようにみえ、そのときにはっきりと正体もわからなかったが、それは黒髪で編まれた網であった。それが、忽然として天からふってきたのだ。
むろん軽いものだから、尼僧たちの頭上からフンワリとかかったままだ。何であるかはしらず、彼女たちはそのえたいのしれぬ網を指でかき破ろうとした。しかし、それが鋼線のようにきれないのに彼女たちは狼狽した。つぎに、まわりに立っていた尼僧たちはかがみこんで、網のすそをあげようとした。一ヵ所をつかんでひきあげると、左右のすそが流動体のように寄ってきて、その脱出口をふさいでしまった。いくどうろたえてくりかえしてもおなじことであった。
「奇怪な――」
「こ、これはどこからおちてきたのじゃ」
その網は天からふってきたとしか見えなかった。が、ほとんど人の目にみえぬ糸が――正確にいえば、ながくつないだひとすじの髪の毛が――その網からのびて、くだかれた山門の内側に立っているひとりの男の手ににぎられていた。
いうまでもなく、四人めの会津侍である。まだ十七、八、前髪立ちの若衆だ。しかも、女のような真っ白な肌の色、朱をひいたような唇。ぞっとするほどの美少年だが、いったい、いつ、どうしてそんな傷ができたものか、ひたいから鼻さ

き、唇からのどにかけて、無残、絹糸をひいたような赤黒い刀痕があった。

だれひとりとして気づいた者もなかったが、その網は彼の手からなげられたのである。はじめ放たれたときは、まるめて手中に入るほどの塊であったのが、天空の一点でぱっとひろがると、数十人をいちどに覆うぐらいの網となって、音もなく霞のように落下してきたのであった。

三人の侍はふりむいて、つぶやいた。

「香炉銀四郎」

「しかし」

とちらと、網につつまれてもがいている尼僧たちに眼をやったのは、大閤の孫にあたる天秀尼そのひとをこんな目にあわせて大丈夫か、という意味だ。

香炉銀四郎とよばれた美少年は、遠くからにやりと笑った。

「おい、何をしておる。はやく堀一族の女どもをとらえぬのか」

黒髪の糸を手中にたぐりこみながら、そろそろとちかづいてくる。

「それ、その霞網のなかに、堀主水の娘お千絵がおるではないか。主水の弟、多賀井又八郎の女房お沙和もおる。またおなじく弟真鍋小兵衛の娘のさくらの顔もみえる。そのほか、まだ六、七羽、小鳥どもが羽ばたいておるようだぞ――」

老尼が、狂気のようにさけんだ。

「し、賤ケ岳七本槍の家柄のものが――天秀尼さまに、な、なんたることを――」

「賤ケ岳七本槍は、もう六十年もむかしの話よ。そこにおる大道寺鉄斎老さえ、生まれていたか、どうか。――そのとき御手柄をたてられた御先代も、太閤もいまやこの世にない。時勢もかわり、人もかわった。おれたちは、会津七本槍衆というのだ。しかし、豊臣家とは、なんの関係もない」

美しい顔に似合わぬかわいた冷笑であった。

「天秀尼天秀尼と、護符のようにいうのが笑止千万。大坂落城後、六条の河原で首をきられた秀頼の子、国松の妹ではないか。女ゆえにからくも命をたすけられ、徳川家の方でもてあまして、この尼寺へほうりこまれたのを、尼将軍にでもなったと思っているのか」

きいていた尼僧たちは、ことごとく蒼白になっていた。

はっきりいえば銀四郎のいうとおりだ。しかし、むごい言葉でもある。こういう人の皮膚をひんめくるような言葉を、けろりとしていってのけるのは、彼の年齢のせいか、それとも、彼の性格のゆえだろうか。

しかし、それで三人の武士は理由のない逡巡から解きはな

たれた。
「そうだ、会津七本槍がいちどいい出したことは、あとにはひかぬ。望んだことは、かならずとげてみせるのだ」
「ひとたび高野山の受け入れた罪人は、大名ですら手が出せぬという。――その高野山ににげこんだ堀一族を、われら会津七本槍がみごとにひきずり出したのだぞ。いわんや、たかが尼寺をや」
「わが殿は、このたびのことに四十万石を賭けておいでなのだ。あくまで堀の女どもをかばおうとするならば、このままこの寺を踏みつぶしてくれる」
口ぐちにわめいたあとで、大道寺鉄斎がふいにまた猫なで声でいった。
「何も女どもまで仕置にかけようとはいわぬ。やがて仕置にかける男どもに、最後の対面をさせてやろうという親切気から思い立ったことだ。にもかかわらず、女は出さぬ、ふところに入った鳥ははなちはせぬなど、増上慢な口をきくから、ちょっと手荒なことをしたのだ。……おとなしく、女どもを門前まで出されい」
「御住持さま」
霞網のなかで、思いつめたような女の声がきこえた。
「せっかくのお情けでございますが、お千絵は参ります。これ以上、この人々にさからいますと、ほんとうにこの寺がふみにじられます」
天秀尼は怒りの眼をじっと会津侍の方にすえたまま、ふるえる声でいった。
「おもしろや、ふみにじらせてみるがよい」
「いいえ、そんなことになりましては、尼公さまの御恥辱のみか、覚山尼公以来、東慶寺の山門にぬぐうことのできない傷がつきまする。堀一族の女として、左様な大事をひきおこしては、このまま生きてこの寺に葬らすこともなりませぬ」
「山門に傷はもうつけられておる。――それに、生きてとそなたはいうが、あのものどもの所業、顔つきをみるに、ただ口で申すばかりでない恐ろしいたくらみがあるような気がしてならぬ」
「あれも会津七本槍というて、殿のお心入れのふかい侍衆でございます。その言葉は信じましょう。それに」
若い女の声は吐息をついていった。
「わたしたちは、死んでゆく父や夫に、やはりひと目あいたいのでございます」
それこそは、天秀尼のただひとつの弱味といってよかった。寺におしかけてきた会津侍たちの心事に疑いをもってはいるものの、いちどは会わせてやろうかと、先刻まよったく

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo